

「笑ふことにやありけむ」

——伊勢物語第八十七段の草子地について——

山 本 登 朗

一 第八十七段の問題点

伊勢物語の第八十七段は、摂津国の芦屋の里を舞台とする章段である。芦屋の里について読者に説明する冒頭部の後、当地に所領を持つて住んでいた主人公を訪ねて、宮仕えの同僚である「衛府の佐」たちや、「衛府の督」だった主人公の兄が集まってきたことが次のように語られ、物語は布引の滝での詠歌の場面へと続いてゆく。

(前略) この男、なま宮仕へしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども集まりきにけり。この男のこのかみも衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、「いざ、この山のかみにありといふ布引の滝見にのぼらむ」と

いひて、のぼりて見るに、その滝、ものよりことなり。長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石のおもて、白絹しろきぬに岩を包めらむやうになむありける。さる滝のかみに、わらうだの大ききとして、さしいでたる石あり。その石の上に走りかかる水は、小柑子せうかうじ、栗の大きさにてこぼれ落つ。そこなる人に、みな滝の歌よます。かの衛府の督まづよむ。

わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ
高けむ

あるじ、次によむ。

抜き乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせ
ばきに

とよめりければ、かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり。

布引の滝の光景を見て、「そこなる人に、みな」、つまりそこにいた全員に歌を詠ませることになり、まず主人公の兄が「わが世をば」の歌を詠む。それに続いて「あるじ」である主人公が「抜き乱る」の歌を詠んだのだが、物語はそれに続いて、

かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり。

と語る。布引の滝の場面はこの言葉で終わり、物語はこの後、芦屋の里にむかつて帰ってゆく一行の帰路の様子を語ってゆく。ひとつの場面の最後に記されたこのしめくくりの部分の表現は、けれどもいささかあいまいであり、その意味について、これまでさまざまな意見が示されてきた。この言葉で、語り手はいったいどんなことを語ろうとしているのだろうか。

二 注釈の歴史から

注釈史をたどってみると、「古注」と呼ばれる鎌倉時代の『和歌知顕集』や冷泉家流の注釈には、この部分についての注は見えないが、室町時代後半に「古注」を否定した一条兼良の『伊

勢物語愚見抄』には次のような注が記されている。（以下、伊勢物語の古注釈の引用は、特記するもの以外は、すべて『伊勢物語古注釈叢刊』（平成一七年・笠間書院）による。）

わらふは、歌のわるくておかしく思ふにはあらず。入興したる心也。

また、宗祇の説を伝える『伊勢物語音聞抄』（文明九年本）には、この部分にただ「入興の儀也」とのみ記されていて、諸本間にも異同はない。このように、この部分を、そばにいた人たちが歌のすばらしさに興じた、つまり賞賛したという意に解する注釈は他にも多く、現代でも、新日本古典文学大系『伊勢物語』（平成九年・岩波書店）の秋山虔氏の注に、

この「笑ふ」は、衛府督の歌の重苦しさを巧みに逸らした奇抜な歌の趣向に、人々はほっとして顔をほころばせ声をあげたのであろう。感嘆のあまり追和しえない。

とあるように、「笑ふ」を賞賛する意に解している注釈は多い。片桐洋一氏『伊勢物語全読解』（平成二五年・和泉書院）が指

摘するように、後続する「この歌にめでてやみにけり」という表現は、次のように伊勢物語にくり返し用いられている、一種の定型的な言い回しであった。

(第六十六段)

昔、男、津の国にしる所ありけるに、兄おとと友だちひきゐて、難波の方にいきけり。なぎさを見れば、舟どものあるを見て、

難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟

これをあはれがりて、人々帰りにけり。

(第六十八段)

昔、男、和泉の国へいきけり。(中略) ある人、「住吉の浜とよめ」といふ。

雁鳴きて菊の花咲く秋はあれど春の海辺にすみよしの浜

とよめりければ、みな人々よまずなりにけり。

これらと対照させて考えると、この第八十七段の場合、「笑ふこと」にやありけむ」は、たとえば例示した第六十六段の「これ

をあはれがりて」に相当する役割を果たしているようにも考えられる。だとすればこの「笑ふ」は、ひとまず入興や賞賛の意に解されるのが妥当であるということになる。

ところが、三条西公条の『伊抄 称名院注釈』には、この部分に「卑下の辞也。一は入興也」とあって、「入興」説との両説併記のようになってはいるものの、「笑ふ」を「卑下の辞」と解する、まったく異なった解釈が記されている。このように、この部分を「卑下」と解する注釈は他にも多く、契沖の『勢語臆断』(『契沖全集』第九卷・昭和四九年・岩波書店)には「『わらふことにやありけん』は卑下の詞なり」とあり、また現代でも、新編古典文学全集『伊勢物語』(平成六年・小学館)には、次のような福井貞助氏の注記が記されている。

人々はこの歌をほめたたえ、自分たちは詠まなくなってしまうのであるが、作者は、一応自作を卑下する体^{てい}で、人々は笑いを催すようなおかしい歌と思ったのであろうか、といったものであろう。

ここには、「作者は、一応自作を卑下する体^{てい}で」と記されているが、これは、伊勢物語を、主人公のモデルである在原業平が

自ら書いたもの、つまりは自記であるとする考えを前提にしている。そもそも、室町時代の学者たちは、伊勢物語を、業平自身が書き遺したものをもとに、業平の愛人だった伊勢が加筆してできあがった作品と考えていた。この考えは現代から見れば、業平と伊勢の年齢の差だけから考えても成り立たない、誤った説であることがはっきりしているのだが、福井氏は、この部分に関しては、そのような業平自記説を前提にした注記を記していることになる。

室町時代の注釈の中には、次にあげる橋本公夏きえんatsuの『志能夫数理しのぶず』のように、福井氏の注記によく似通った内容の記述も見られる。

有興ノ義也。業平卑下の詞也。此歌ニメデテヤミニケリト侍ルニテキコエタリ。

ここには「有興」と「卑下」の両方の語が見えてわかりにくい。が、「有興」は「入興」と違って、滑稽に思つて笑い飛ばした、という意味に用いられているように思われる。それを公夏は、「業平卑下の詞」と言うのである。そして、さらに注目されるのが、注記の後続部分に「此歌ニメデテヤミニケリト侍ルニ

テキコエタリ」と記されていることである。表現が不十分でわかりにくい。が、ここで公夏は、福井貞助氏が述べているのとは同様のことを言おうとしているように思われる。後続部分と矛盾することが記されているからこそ、「笑ふことにやありけむ」の部分は作者の卑下の言葉と考えられ、以下の第三者的表現とはいわば逆説的につながるのだと、公夏は述べているように考えられるのである。

以上、いくつかの注釈書の注記を紹介した。この部分については、なお、ここに挙げなかったさまざまな読解案が示されているが、それらすべてを含めて、まず注意されるのは、「笑ふことにやありけむ」の「笑ふ」を、賞賛や感嘆の意味に解するか、嘲笑や冷笑の意に取るかによつて、解釈の方向が大きく二つに分かれるということである。「笑ふ」という語の意味だけからはどちらの可能性も否定できないので、この問題は、さらに別個な視点から考えられなければならないと思われる。

三 疑問推量の草子地

この「笑ふことにやありけむ」は、「やゝけむ」という疑問推量の形をとった挿入句、すなわちはめ込み文であり、竹岡正夫

氏『伊勢物語全評釈』（昭和六二年・右文書院）が言うように「物語者自身の推量表現」と見るべきものだが、別稿「『いちはやきみやび』——伊勢物語の草子地——」（近刊『伊勢物語の生成と展開』第二章二、初出は「『いちはやきみやび』——伊勢物語の主人公と語り手——」（片桐洋一編『王朝文学の本質と変容・散文編』平成十三年・和泉書院）で指摘しているように、それはすべていわゆる草子地と見るべきものであり、しかもこの形の草子地は伊勢物語にきわめて数多く見られ、この物語の特徴的文体を形作る上で重要な役割をはたしていると考えられるものであった。伊勢物語に二十例以上見られる同種の表現の中から、いま、問題にしている第八十七段の事例に類似していると思われる九例を示しておく。

（第二十一段）

この女、いと久しくありて、ねむじわびてにやありけむ、言ひおこせたる。

（第三十七段）

昔、男、色ごのみなりける女に会へりけり。うしろめたくや思ひけむ、

（第四十五段）

うち出でむことかたくやありけむ、ものやみになりて死ぬべき時に、

（第六十二段）

昔、年ごろおとづれざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、

（第七十七段）

そのかみは、これやまさりけむ、あはれがりけり。

（第九十三段）

少したのみぬべきさまにやありけむ、ふして思ひ、おきて思ひ、思ひわびてよめる。

（第一百三段）

心あやまりやしたりけむ、みこたちのつかひ給ひける人を、あひ言へりけり。

（第一百四段）

かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌よみてやる。

（第二百十三段）

深草に住みける女を、やうやうあきがたにや思ひけむ、かかる歌をよみけり。

これらは、別稿でも述べているように、語り手が、作中人物の心理などについて疑問をまじえた推測をしたり、それが語り手にも不明、不審であることを、ことさらにことわったりしている部分であるが、それを第八十七段にあてはめると、この「笑ふことにやありけむ」は、「かたへの人、…この歌にめでてやみにけり」、すなわちこの主人公の歌のすばらしさに感嘆して自分たちが歌をよむことをやめてしまったという一行の人々の行動について、語り手の立場から疑問を投げかけ、いぶかしんでみせた表現と言うことになる。表面的には「かたへの人、…この歌にめでてやみにけり」という賞賛の形でしめくくられたこの場面の終末について、語り手は、実はそれは「笑ふこと」であったのではないかと、疑問を投げかけていると考えられるのである。

四 和歌の評価

伊勢物語には、主人公や登場人物が詠んだ歌について、物語の語り手が消極的な評価を下す、次のような草子地が見られる。

(第三十九段)

あめのしたの色好みの歌にては、なほぞありける。
(第百三段)

…とよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。

同種の例の中でも、次の事例では、その場の人たちが賞賛した、その歌について、語り手が「今」の立場から、「今見ればよくもあらざりけり」と否定的な評価を下している。

(第七十七段)

…とよみたりけるを、今見ればよくもあらざりけり。
そのかみは、これやまさりけむ、あはれがりけり。

本論で問題にしている第八十七段の「かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり」の場合も、その場の人たちが「この歌にめでてやみにけり」という対応を見せて賞賛したのに対して、語り手は、「笑ふことにやありけむ」、すなわち彼等は実は笑っていたのではないかと推測して見せている。この表現のかたちは、第七十七段の場合と類似するところが大きいように思われる。

また、次の例は、歌に対する消極的な評価が、「や」を用いた

疑問表現で述べられている事例である。

(第三十三段)

ゐなか人のことにては、よしやあしや。

(第八十七段)

ゐなか人の歌にては、あまれりや、たらずや。

「笑ふことにやありけむ」もまた「や」を用いた疑問推量の形で表現されており、その点で、これらの事例と共通するようと思われる。この点でも第八十七段の問題の表現は、伊勢物語中の他の部分とも似通った、いかにも伊勢物語らしいものだったと考えられるのである。

これらを勘案した結果、第八十七段の「かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり」という表現は、「かたへの人、この歌にめでてやみにけり」つまり、その場の人たちが主人公の詠歌を賞賛して自分たちが詠むのをやめてしまったという語りに対して、いやそれはそうではなく、人々は実はその歌を笑ってそのようにしたのではなかったかと、語り手が自分の立場から主人公の歌をいささか消極的に評価して推測し、それを挿入句の形で文中にはめ込んだものではなかった

かと思われる。そしてそこには、別稿でも述べたように伊勢物語の草子地に一般的にうかがわれる、語り手が主人公を、親しみを込めながらことさらにユーモラスに批判してみせるという、主人公と語り手の間の、いかにも伊勢物語らしい関係がうかがわれるように思われるのである。

五 段末との呼応

さきにも最後の一文だけを例示したが、この第八十七段の最後の部分は、次のように語られている。

その夜、南の風吹きて浪いと高し。つとめて、その家の女の子ども出でて、浮き海松の浪に寄せられたる拾ひて、家の内にもて来ぬ。女方より、その海松を高坏に盛りて、柏を覆ひて出だしたる、柏に書けり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり

ゐなか人の歌にては、あまれりや、たらずや。

「わたつみの」の一首は、表向きにはこの家の「女方」から客

人たちに、「海松」に添えて贈られた歌だが、読者の多くは、この歌は実はこの家の主人である主人公が女たちのために詠んだ、一種の代作歌であつたのではないかと考えると思われる。そのような歌について、語り手は、「ゐなか人の歌にては、あまれりや、たらずや」と述べて、疑問を交えながらも、ことさらにおとしめて見せている。そしてこの、いささかユーモラスな和歌批評によってこの章段は終わっているのだが、この言葉と、本論で問題にしている「かたへの人、笑ふことにやありけむ」という、前半部の最後に述べられている表現は、同じ章段の、前半と後半それぞれの部分のしめくくりの言葉として、同様の雰囲気と共有しているように思われもする。主人公や主人公側の歌をことさらにおとしめて見せることで、堅苦しい礼儀や作法の世界を脱したユーモラスな雰囲気と、此等の表現は生み出しているのではないだろうか。

六 遊覧の雰囲気

この第八十七段で主人公は、「この男、なま、宮仕へしければ」と語られている。「宮仕へ」をしてはいるが、それが本意なものであり、意欲的に取り組んではない、あるいは取り組む気

になれない現状を、「なま」という接頭語は表しているように思われる。芦屋の住まいを訪ねてきた同僚たちも、主人公のそのような心情を共感することができ、同じ思いを持った同僚であつたろうと思われる。そして、布引の滝で兄の「衛府の督」が詠んだ「わが世をば」の一首も、自分自身の不遇を歎くものであつた。彼等はみな、鬱々とした満たされない気持ちを抱きつつ、今はそのような都の日常からひととき解放されて、芦屋の付近を遊覧しているのである。第八十七段に描かれた遊覧や交友は、そのようなものであつた。

こう考えると、本論で問題にしている「かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり」という言葉の「笑ふこと」についても、それをさげすみを含んだ冷笑や嘲笑とみるよりも、暖かい交友を背景にした、主人公の歌をめぐっての明るい微笑や哄笑と考えた方がよいように思われてくる。語り手は、「かたへの人、この歌にめでてやみにけり」という、いっささか堅苦しい賞賛の叙述に対し、そこには、共感に満ちた笑いがあつたのではないかと、草子地の形で付記しているように思われるのである。

本論の前半では「入興」説と「卑下」説を紹介して、「笑ふ」を、賞賛や感嘆の意味に解するか、嘲笑や冷笑の意に取るかに

よって、解釈の方向が大きく二つに分かれる」と述べたが、このように、笑いを暖かい微笑や哄笑と考えれば、「入興」説と「卑下」説は、笑いの性格に関しては、必ずしも背反するものではなく重なり合ってくるように思われもする。堅苦しい賞賛表現を草子地を加えることによってやわらげながら、語り手は、「かたへの人」の、主人公の歌の大胆な表現に対する驚きと、内容に対する共感を、巧妙に語っていると考えられるのである。

付記 関屋俊彦教授のご学恩に感謝し、「笑い」について考えた、このささやかな論をささげる。

(やまもと とくろう／本学教授)